

長崎大学大学院教育学研究科
教職実践専攻

平成29年度

教育研究成果報告書



平成30年3月

「実践研究」の充実を目指して

現代的教育課題への対応が可能で即戦力となり得る若手教員や学校の中核的教員の養成を目的とした教職大学院が平成20年度に設立された。以来、本教職大学院は、新しい時代の学校教育に必要な専門性と実践的指導力を有する教員の養成を目指してきた。平成26年4月からは、それまでの修士課程(学校教育専攻、教科教育専攻)を改組して、全国に先駆けて教職大学院(専門職学位課程)のみに再編し、子ども理解・特別支援教育実践コース、学級経営・授業実践開発コース、教科授業実践コースの3コース制を敷いた。

その教職大学院は、理論と実践を架橋する教育を目指しながら、学部卒学生の高度な教育実践力と指導力の養成、及びマネジメント能力を備えた現場の中核的教員の養成を行っているが、とりわけ「実践研究」を中心に据えた教員の育成を行っている。

教育は、教師が先見的な人間形成を意識したうえで、子どもの実態の把握と学びの環境作りを行いながら、学習のねらいを達成するプロセスであり、そこに介在する様々な要因と自己の取り組みの関係性を省察することで向上が図られるものであろう。そのことを念頭において、教職大学院で行う教育は、理論と実践を架橋することを目指し、学生が自らの教育実践を通して、教師とは何か、教育とは何かを問うことを重視する。また、学部や大学院で学んだ専門的知識を活用して、授業や子どもの実態を見取り、分析し、問題点を見出し、それらを自らの課題に変換し、次の教育実践に反映させるプロセスを第一の基本とする。他方、そのプロセスを着実に実行するには、既存の修士課程で培われてきた研究的思考も必要である。その研究的な思考や理論によって教育実践を支えるには、研究者教員が学校現場や教育行政や地域のことをよく知ることも必要である。そこには、教育委員会、教育センター、各教科の研究部会、学校や教員とつながるシステム作りが欠かせない。引き続き、今後も大事にしたいポイントである。

本年度の大学院生による教育実践研究を見ると、平成20年度の設立当初よりも内容が充実してきた。子どもの実態や学校現場の実際を踏まえた研究があり、学校現場に資する内容がある。このような充実した実践研究が行えるようになってきた背景には、実習生の努力のみならず、実習協力校の先生方を始め、教育委員会や教育センター等の先生方のご指導、ご助言、ご尽力があることを忘れてはなるまい。この場を借りて厚く御礼申し上げる。これらの先生方には、今後も、本大学院における教育実践力の高度化のために、ご忌憚のないご意見を賜うことができればと願う次第である。

平成30年 3月

長崎大学大学院教育学研究科
研究科長 松元 浩一

目 次

はじめに

学校教育実践実習の概要と報告 1

大学院生による学校教育実践実習の報告

実 習 1 2

実 習 2 3

実 習 3 5

実 習 4 6

実 習 5 6

学校教育実践実習の振り返りの会（コロコロ会）… 7

教育実践と省察のコミュニティ 2017 8

「新しい時代の教育実践をめざして」

クロスセッション 2017 13

教育実践研究成果の発表概要 18

学校教育実践実習の概要と報告

学校教育実践実習のねらい

学校教育に関する基礎的・理論的な理解の上に、学校の教育活動全般を主体的に経験し、省察すること。また、学級経営、授業実践、生徒指導、教育相談等にかかわる課題や問題に関し、指導教員の指導の下で自ら立案した計画に沿って解決策を実践し、経験することで、学校におけるさまざまな課題に主体的に取り組むことのできる資質能力を培うこと。

構成

- ・ 学校教育実践実習 1 (学級経営、生徒指導)
- ・ 学校教育実践実習 2 (学級経営、授業実践)
- ・ 学校教育実践実習 3 (生徒指導、教育相談)
- ・ 学校教育実践実習 4 (各コース実践研究)
- ・ 学校教育実践実習 5 (各コース実践研究)

学校教育実践実習の内容

教職大学院における教育実習は、大学院生が学校の教育活動全般を経験できるように、「学校教育実践実習 1～3」において、便宜上、実習ごとに中心的な内容（学級経営・生徒指導、学級経営・授業実践、生徒指導・教育相談）が定められており、大学院生は、これらの実習を含む全ての実習（「学校教育実践実習 1～5」）において、主体的にテーマを設定し、実習の計画を作成し、積極的に取り組むことが求められている。

学校教育実践実習 1（学級経営・生徒指導）

目標

学校、学年、学級の教育目標を達成するための条件整備の力量を向上させるために、物理的環境整備と人間関係的条件整備に関わる資質や能力の向上を目指す。また、児童・生徒理解に基づく生徒指導等に必要な資質や能力の向上を目指す。

実習内容

学級経営補助や基本的生活習慣づくりの補助など、学級担任教師の活動の観察や補助活動を通して、学級経営の意義と実際について理解を深め、実践できるようにする。また、各教室の掲示物、児童・生徒の座席配置、安全への配慮などを、観察や担任教師からの聞き取り等を通して理解し、実践できるようにする。

また、児童・生徒の行動観察や指導補助を通して、一人ひとりの児童・生徒の個性や集団としての特徴などについて、さらに児童・生徒が学校生活、学級生活に満足感を持ち、楽しい学校生活を作っていくための条件などについて理解を深め、集団づくりやソーシャルスキルを育てるための手だてを修得する。

院生による学校教育実践実習 1 の報告

小鉢 拓（学級経営・授業実践開発コース）

私は 4 月から 6 月まで、毎週火曜日に長崎大学附属小学校の 5 年 1 組で実習を行わせていただいた。実習を行う中で私は「学級のルール作り」に着目した。具体的には、学校生活の様々な場面で教師が行う手立てや児童がルールについてどのように考え、行動の中に表れていくのかについて考えを深めることができた。4 月は学級のルールを形成・定着させる重要な時期である。この時期の児童の姿を 6 月までの長期にわたって観察できたことも私にとって学び多きものであった。また、毎週 1 日の実習の中で気づいたことや疑問点、自分の児童との関わり方について考えたことを大学で改めて考え直し、次週の実習での観察の視点や教師としての自分の姿を随時振り返ることができた。学級担任が大切にしている思いとその思いから計画的に手立てを打つことで教師の指導が一貫性をもっていることの重要性が分かり、自分自身の教師観を見つめなおすことができた有意義な実習だった。

柳川 優希（学級経営・授業実践開発コース）

「多様な生徒を包摂した学級づくり」に着目して、生徒の行動観察および指導補助に取り組んだ。まずは、生徒の実態を把握することに尽力し、配属学級を中心に授業観察をした。自分が見取った生徒の様子は、実習生や担任教員と共有し、生徒理解に努めた。また、実践

実習1の期間中には、附中祭「春」(体育祭)が催され、行事を軸とした学級経営、学年経営を学ぶことができた。生徒を指導する際、担任教員は学級全体に向けての指導と、個別の生徒への指導とを使い分けていた。全体への指導では、教師の思いや、学級の現状、目指す姿が語られた。個別の指導では、それぞれの役割を意識させ、どう動くべきかを考えさせる場面が見られた。その後の生徒の口からは、学級の課題や目標、集団を意識した言葉が表れるようになり、それぞれの生徒が集団と自己を俯瞰して考えるようになる変化がうかがえた。「集団と個」という実習2につながる視点を得られた実習であった。

学校教育実践実習2 (学級経営・授業実践)

目標

学校、学年、学級の教育目標を達成するための条件整備の力量を向上させるために、物理的環境整備と人間関係的条件整備に関わる資質や能力の向上を目指す。また、指導計画や学習指導案の作成、授業実践等を通して、教師としての使命感や教育観をより強固に形成するとともに授業力の一層の向上を目指す。

実習内容

学級経営の計画、学校の組織運営(校務分掌)の在り方について演習を通して理解するとともに、学級づくりのためのソーシャルスキル訓練の実習、討論を通しての話し方・聴き方の育て方等の能力の向上を図る。さらに、学級通信の作成補助などを通して家庭と連携する力量を高める。また、事例研究などを通してP(計画)―D(実施)―C(評価)―A(改善)のマネジメントサイクルによる実践ができるようにする。

また、教育課程編成の在り方や運営、具体的取組について実践的に学び、年間(単元)指導計画や学習指導案の作成、学習材の開発、及び授業参観や授業補助、授業実践等の活動を通して、教師の日常の活動を学び、教師としての使命感や教育観をより強固に形成するとともに、授業力を一層向上させる。

院生による学校教育実践実習2の報告

城戸 佑也(学級経営・授業実践開発コース)

実践実習2では、「生徒が知識を確実に習得することができる授業の探求」を実習のテーマとして設定し、9月に10日間附属中学校で授業観察および授業実践を行った。授業観察では、生徒が知識を習得するために必要な教師の手立てに注目して観察した。授業実践では、「生命を維持するはたらき」の単元の授業を計4回行い、生徒が知識を習得すること

を目的とした時間と活用する時間を1時間の授業の中に取り入れ、生徒が確実に知識を習得することが出来る授業を目指した授業実践を行った。授業観察や授業実践、授業実践についての省察を通して、知識を習得する上では教師が詳しく説明することよりも、生徒が学んだことを言語化し他者に対して表現することが重要であることがわかった。また、言語化を行う際には言語化の内容にもこだわること、具体的には聞き手が理解できることなどを常に意識し、生徒に試行錯誤させることが重要であるとわかった。

松尾 頼亜（学級経営・授業実践開発コース）

「授業内での生徒との信頼関係づくり」というテーマのもと、中学1年生と関わり、数学の授業実践を行った。実践実習を通して教材研究が重要なポイントだと感じた。生徒が楽しいと思い、わかる授業であることが生徒の信頼を得ることができるのではないだろうか。生徒が楽しみだと期待できるような時間にしたい。机間指導という形で生徒と関わるとうまくいったが、実際に授業をしながらやるとなるとうまくはいかなかった。個人に注目してしまうと全体を見ることができなくなってしまい偏ってしまう。そうすると授業中に温度差が出てしまう。全体に分かる的確な指示が必要である。それでも机間指導を通して生徒と話す回数が増えたことは確かである。それをきっかけで授業外でも話すことが増え、相談されることも増えた。1対1できちんと向き合って話すことが大切だと感じた。生徒と信頼関係を作るためには教師側がまず生徒を信頼することが大切である。

松永 千茄（学級経営・授業実践開発コース）

「小学校外国語活動において複式学級に属する児童のコミュニケーション能力を育む授業デザインと実践」というテーマのもと、実習を行った。附属小学校の5・6年A組に配属され、実習1での実態把握や課題把握を継続しながら、授業実践を行なった。また、家族のように温かい雰囲気の中で、少人数学級の良さや課題とどのように向き合いながら、担任は学級経営を行なっているのかを中心に観察を行なった。週1の実習1とは異なり、継続的に関わる中で、見えた児童の姿があった。小規模学級の児童達は、お互いに「言わなくても伝わるだろう...」という気持ちでいる様子が見受けられた。お互いに考えていることをしっかりと言葉で伝えるからこそ相手が思っていることを知ることができる。固定化された人間関係の中で、お互いを知るためにコミュニケーションを図っていくことが、特に少人数学級には必要であると感じた。少人数学級だからこそできる学びを、児童一人一人と向き合っていく中で、今後も大切にしていきたい。

学校教育実践実習 3（生徒指導・教育相談）

目標

児童・生徒理解に基づく生徒指導、教育相談、特別支援教育、キャリア教育等に必要な資質や能力の向上を目指す。また、一人一人の児童生徒のニーズに合った指導・支援についての理解と適切な指導能力を培うことを目指す。

実習内容

児童生徒の持っている力を引き出すために、生徒指導の3機能である「自己存在感を与える」「共感的な人間関係を育成する」「自己決定の場を与える」を適切に位置づけた学級経営や教科指導を計画し実践する。

また、教育相談的視点を生かした集団づくり・授業づくりを計画・実践し、教育上の配慮を必要とする児童生徒への合理的配慮の在り方についても理解し、実践する。

いじめ、不登校等の要因となる指導上の課題を見出し、改善のための具体的方策を考え取り組むなどの実践ができるようにする。

院生による学校教育実践実習 3 の報告

濱崎 知彦（学級経営・授業実践開発コース）

実習 3 では、長崎市内の公立小学校の 5 年生の学級において観察、授業実践をさせていただいた。「児童の関心及び意欲を高めるための教師の手立て」というテーマのもと、授業内外での教師と児童との関わりを観察した。また、毎週 1 日ではあったものの、朝から夕方まで、1 人の教師として動くことで、現場の実態を知り、児童とも深く関わって指導・支援する経験ができた。後半には、実習先の先生方の支援もいただき、2 本の授業実践を行うことができた。実際に授業を行う中で、教師の発言のタイミングや具体性、興味を引き付ける教材の工夫、学習内容をいかに児童の日常体験と結び付けるかを意識して授業をつくることが重要だと学んだ。また、授業中の児童の様子や振り返りから、児童の学びへの関心・意欲の程度を観察し、実態を把握しながら指導を行った。今後の実習では、児童の実態を踏まえたうえで、引き続き研究を行い、自身の力量向上にも努めていきたい。

藤田えりか（教科授業実践コース）

実習 3 では、「生徒の読譜力を高めるために」という研究テーマのもと、毎週 15 分程度の時間を使い、継続的に授業実践をさせていただいた。読譜力とは、楽譜に記されている内容を正確に読み取る力のことであるが、内容といってもリズムや階名、強弱記号、音楽記号など様々である。しかし、10 回の授業実践で全ての内容を取り扱うことが難しいため、

ここでは主にリズムに着目し、四分音符や八分音符などの簡単なリズムを用いて「ドレミ」の3つの音から好きな音を選んで作曲する創作の授業を行った。授業の様子からリズムを作ることと音を付けることを同時にすることは難しいようであったが、生徒からは「自分でリズムを組み合わせて曲を作るのは楽しかった。」「いつか自分の好きな音をつけて作曲してみたい」という意欲的な意見もあった。実習4では生徒に身に付けさせたい読譜力の焦点化を図り、実践していきたい。

森竹 恭眞（学級経営・授業実践開発コース）

今回の実践実習③は、これまで附属中学校での授業観察・授業実践を通して、浮かび上がった課題を基に臨んだ実習であった。実践実習③は主に授業観察が中心であった。そのため、先生方の授業で気づいた点、あるいはインタビューの実施を行うことで、今後の自分自身の実践研究のテーマをより具体的にしていきたいという思いがあった。特に実習先の先生方が行った授業の中で印象的だったのは、3年生の公民の授業で行われたディベート活動である。各クラスで取り上げられたディベートのテーマは異なっていた。しかし、単元を通してディベート活動を行うことで、テーマの是非について「なぜ、そのような選択・判断をしたのか」という根拠を生徒たちの中でしっかりと持たせるという先生方の意図を感じ取ることができた。今回の実習を通して、中学校社会科の教科指導がどうあるべきなのか、自分なりに考えを深めることができたのではないかと思う。

学校教育実践実習4・5（各コース実践研究）

目標

学校教育にかかわる実践研究課題について、自ら立案した計画に沿って解決策を実践し、経験することで、学校におけるさまざまな課題に主体的に取り組むことのできる資質能力を培うこと。また、自ら実施した実践研究に基づいて「実践研究報告書」（最終レポート）を作成すること。

実習内容

受講生は、自らの実践研究課題を設定し、実践研究を中心とする実習を主体的に行うことが求められる。そのため、実践研究課題や研究計画等を記した実習計画書を作成し、計画に沿って積極的に実習を行い、実習終了段階では検証計画に基づき自らの実習を評価し、「実践研究報告書」（最終レポート）を作成する。

学校教育実践実習4、同5の報告は、研究成果の発表概要として、後述の「教育実践研究成果発表」の項に、掲載されている。

学校教育実践実習の振り返りの会（コロコロ会）

今年度から研究科全体での実習の振り返り会(コロコロ会)を教員と大学院生が協働で企画をした。午前と午後の2部門制とし、各部門7班に分けた。各班は、ファシリテーター1名(大学院生)、報告者2名(大学院生)と聴講者(大学院生2名と教員1～2名)で構成されている。実習を多角的に捉え、多様な視点から論究することで、学びを深化させる時間となった。

日時：平成29年12月19日(火) 10:00～12:00、13:00～15:20

場所：SCS 教室

内容：大学院実習の振り返り(ラウンドテーブル形式)

コロコロ会のご案内

～あなたに向かって
学びがコロコロころがるよ～



12月19日(火) SCS教室にて

午前の部 10:00～12:00
「M1による実習の振り返り」

午後の部 13:00～15:20
「M2・3による実習の振り返り」

- ラウンドテーブル形式で行います。
- 受付の際にお菓子代100円を集めます。
- ご不明な点がございましたら、立岡昌文先生 (m-tateoka@nagasaki-u.ac.jp) にメールをお願い致します。

■スケジュール

時間	内容	報告者
10:00～10:10	受付	
10:10～10:25	開会の挨拶と趣旨説明	
10:25～10:30	各テーブルで自己紹介	
10:30～11:15	M1による実習の振り返り 15分報告+30分協議	A
11:15～12:00	M1による実習の振り返り 15分報告+30分協議	B
12:00～13:00	休憩	
13:00～13:40	M2・3による実習の振り返り 10分報告+30分協議	C
13:40～14:20	M2・3による実習の振り返り 10分報告+30分協議	D
14:20～14:30	休憩	
14:30～15:10	M1・2による実習の振り返り 10分報告+30分協議	E
15:10～15:20	閉会の挨拶	

※発表者の詳細につきましては、裏面をご覧ください。

教育実践と省察のコミュニティ 2017

「新しい時代の教育実践をめざして」

「教育実践と省察のコミュニティ」は、平成26年度より、「教育実践研究フォーラム in 長崎大学」と連動して2日間にわたり開催されている。1日目に「実践研究長崎ラウンドテーブル」を2日目に「教育実践と省察のコミュニティ」を開催した。大学院生のポスター発表は31件、附属学校・学部教員の研究発表は29件あり、参加者数は215名(のべ429名)であった。シンポジウムでは、教育現場のニーズの高い道德教育に関わるテーマを取り上げ、講演・協議を行い、今日的な教育課題に関する治験を深める有意義な機会となった。以下は、大学院生および教員によるポスター発表や講演に関する大学院生のコメント等を「ニュースレター No.15」より抜粋掲載したものである。

(1) ポスター発表について

子ども理解・特別支援教育実践コース 石田 早季

ポスターセッションは、自分の実践研究との結びつきが期待されるものを中心に、附属学校の先生方や、他専攻・他校種の先輩方の実践研究も聞くことができる、大変貴重な機会となった。発表を受けて、実際に、自分の実習校での授業に取り入れようと決めた活動もあるなど収穫は大きい。また、現代の教育課題を踏まえた実践研究も多くあり、将来現場に出たときのためにと興味深く聞くことができた。来年度、自分が発表者となった際にも、今回の先生方、先輩方のように参加者にとっても実りのある発表ができるよう、今後の実践研究に取り組んでいきたい。

子ども理解・特別支援教育実践コース 本多 利衣

ポスターセッションでは、現代の教育課題を踏まえた様々な視点からの実践研究を見ることができ、とても勉強になった。この時間は実践報告をして下さるだけでなく、様々な校種の専門性をもった方々が集まって、お互いに意見交換できる場が作られている。そのため、研究についてより多面的な視点を得ることができ、考えが深まる時間となった。さらに、自分自身の研究につながる実践報告についても学ぶことができ、新たな課題等が見つかる有意義な時間となった。この時間の学びを、これからの実践研究に活かしていきたい。

学級経営・授業実践開発コース 田村 健太郎

ポスターセッションには教育学研究科の教職員や学生だけでなく、教育に携わる多くの方々が参加されていた。今回は参加者としてこの場に立たせていただいたが、会場の熱量の高さに圧倒されてしまった。そんな中でも発表者の方へ質問したり、そこで行われた議論

に参加する中で多くの学びが生まれた。来年は私も発表者としてこの場に立つこととなる。来年もまた今回のように参加者とともに学びを深められるような場を作り上げていきたい。そのためにも今回の学びを活かして、来年のこの場で良い発表ができるように自身の研究に取り組んでいきたい。

学級経営・授業実践開発コース 朝倉 諒

実践研究ポスター発表では、教職大学院生や附属学校園教員等による実践研究の報告が行われた。発表者の報告に対して、質問者が意見を述べ議論が行われた。参加者には教育に携わる様々な立場の方が参加した。質問者だけでなく、そのほかの参観者も随時意見をお互いに交わすことで、深い議論の場となった。ポスター発表では、発表者と参観者が近くで直接面と向かって対話ができる。お互いに対話を繰り返していくことで、実際の現場が抱えている教育的課題について多角的・多面的に議論ができ、また、本気で語り合える場であった。

教科授業実践コース 石橋 菜々子

院生の先輩方や現職の先生方のポスター発表を聞いて、どんな風に研究に取り組んでいるのか(研究の進め方)を知ることができ、私自身の今後の実践研究の方向性と結びつけて考える機会になった。また、自分が興味を持った発表を自由に見に行ける環境や発表者と参加者の距離も近いため、知りたいと思った研究の内容についての理解を深めることができた。さらに、色々な発表を聞くことで自分が知らないことを知ることができ、多くの学びがあった。今回のポスター発表を通して得た学びを活かして、今後の実践研究を行っていきたい。

教科授業実践コース 小洞 琢己

この度、長崎大学教育学研究科において主催されたポスターセッションは、普段あまり目にする事のない様々な領域の研究をオープンな環境の中で話し合うことでこれまでにない知見を得るとても有意義な時間であった。研究は授業の手法からシステム、情報機器を生かした学級運営など多岐に渡り、改めて実践研究の幅広さを確認すると共に、来年は私が発表する立場であるため、昨年度と今年度のポスター発表に参加した経験を活かし、今後の研究に取り組んでいきたいという感想を抱いた。

(2) ポスター発表の総括について

子ども理解・特別支援教育実践コース 平野 晶子

実習1～5での実践を重点的に踏まえたポスター発表を聴き、現場での多様なニーズに合わせた研究の深め方を学ぶことができた。どの発表にも「現場に寄り添う」という点では

共通している部分があり、自身の研究内容に対する視点を振り返ることができた。講評でもあったように、実践研究をどのように位置付けるかは、自分自身が常に意識する必要がある。座学での学びを現場の必要性に応じてアレンジをし、実践することができる教職大学院生の強みを最大限に活かし、新たな視点の一つとして現場に還元できるように努力していきたい。

子ども理解・特別支援教育実践コース(現職教員大学院生) 須寄 美也子

ポスターセッションの総括では、附属小・中学校と附属特別支援学校の校長先生、東京学芸大学の渡辺先生よりお話をいただいた。校長先生方には、実践研究の取組方やまとめ等について個別の内容について具体的にお話をしていただいた。これから研究をまとめる私たちにとってイメージしやすい内容でとても有意義なお話だった。「自分の研究の位置を明確にし、ぶれないように」という言葉が印象に残った。この言葉を心にとめて実習に臨みたいと思う。

学級経営・授業実践開発コース 中俣 浪漫

ポスター発表の総括では先生方による発表者へのアドバイス内容と、先生方のまなざしという2点から学ぶことが出来た。まず、先生方から発表者へ向けられた助言を具体的に聞くことが出来たため、自分が発表者としてポスター発表を迎えたときの参考にしたいと思う。また、先生方が発表者に対して「参考になりました」「ありがとうございました」などと声掛けされているのを耳にしたことで、先生方もまだまだ学び続けようという熱い思いで発表をお聞きになっていたのだと感じた。それにより私も2年後にそのようなまなざしを向けていただける発表がしたいと思うと共に、私自身も先生方の姿勢を見習って学び続けなければならないと決意を新たにすることが出来た。

学級経営・授業実践開発コース 山口 大樹

東京学芸大学の渡辺先生の講話の中で、実践研究とは何かについて考えた。実践には、児童に身につけさせたい狙いや願いがあるが、研究にはなぜそれを行うのか問いが必要である。実践研究を進めるに当たって、狙いが達成されたかどうかだけでなく、その実践が狙いを達成する以外にどのような効果があったのか。実践をすることで初めて気づく発見が何だったのかを実践報告としてまとめることで幅広い報告となることに納得した。私自身も日常生活を含め学校生活の中で、当たり前になっていることを問い直すことから新たな発見をしていきたい。

教科授業実践コース 江川 采奈

今回のポスターセッションの総括を拝聴し今後どのように研究を進めていくべきか、考えるきっかけとなった。なかでも、渡辺先生が話された「問いを持つ」ということが大切であ

ることに改めて気づかされた。本などに書かれていることがすべて正解ではなく自分自身、実習を通して実際に見たもの感じたものを素直に表現していきたいと感じた。今後の実習では生徒の発言や行動などに対して「なぜ」という疑問を持ち取り組んでいきたいと思った。そのためにも、周りとの意見交換を大切に、多くの方々と交流する機会を充実させていきたい。

教科授業実践コース 八尋 慶一郎

総括では改めて教育実践研究の奥深さを感じることができた。私は先輩方のポスターセッションを聞いて、ただただ感心するばかりだった。しかしコメントして下さった先生方はさすが教育の専門家というような鋭い指摘をされていた。新しい教え方を見つけて、成果が出たならば、全員がその教え方を実践すればよいのではないのか？実践研究は成果を上げるためだけにやっているわけではない。私は3年プログラムなのでまだ研究のイメージは全然つかめていない。なぜ、この研究をするのか、この研究はどのようなことに活かせるのか、研究を行う際は成果だけを見るのではなく、この研究の結果がどのようなことに活かせるのかを考えたいと思った。

(3) シンポジウム(道徳教育)に関する講演について

子ども理解・特別支援教育実践コース 下田 みのり

平成30年度より、小学校では「特別の教科道徳」が全面実施され、「考え議論する道徳」の授業が求められる。これまでの道徳の授業は、子どもたちが既に分かっていることを尋ね、「教師が求める答え」を探す授業になっていた。しかしこれからの道徳では、子どもたちが一歩先のことを議論できる問いを、教師が立てることが必要だと学んだ。表面的にはなく、価値項目について子どもたちがしっかりと考え、その子なりの“最適解”を見つけ出すことができるような授業を行うことが必要だと思う。そのような授業を展開できるようこれからも学びを深めていきたい。

子ども理解・特別支援教育実践コース 兼 祥子

今後の道徳の教科化に向けて、道徳という教科で何を教えるべきか、何を目指すべきかについて議論を交えながら考えることができた。道徳とは、一般的なこと、わかっていることを確認する授業ではなく、いろんな角度から問題を捉え、わかったうえで、その先を考える授業を教師は考えていく必要がある。そして、道徳とはこうだと伝えることができるものではなく、様々な形があるのが道徳であるため、教師自身が児童や時代の変化に合わせて展開していくものだと知ることができた。

学級経営・授業実践開発コース 大石 溪

今回のシンポジウムで、道徳の時間は表面的な善だけを述べる時間ではなく、子どもが物事の本質を考え、議論できる時間にならなければならないと思った。そのために、道徳の授業では子どもにその物事がなぜ良いのか、なぜ悪いのかを多様な角度から考えさせたい。また、まずは教師として私が普段の生活の中から道徳について考え、授業づくりの中で様々な人と議論していく必要があると強く感じた。そうすることで、実際の生活場面で子どもは状況に応じた判断ができるようになると考えた。今回の貴重なお話を今後の授業づくりに役立てたい。

学級経営・授業実践開発コース 矢島 佑樹

本日、松下先生、服部先生から道徳について何を「考え、議論するのか」の視点から様々な道徳の考えを聞くことができた。その中で、一番印象に残っているのは、普段の道徳の視点を超えた、「わかる」を作る道徳授業である。道徳活動は全教育活動で行われるものである。そこで、学習指導要領の内容に書かれていることに対して善いか悪いかを考えることを児童に問うのではなく、その奥にある本質を児童に問いかけることが重要であることを学んだ。これから教員になっていくうえで、45分から50分の道徳の授業を大切に、多面的・多角的な視点から授業づくりを行っていききたい。

教科授業実践コース 佐田 彩佳


平成30年度から小学校、31年度から中学校の特別の教科・道徳の完全実施に向けて、今回のシンポジウムは今後の道徳の授業の在り方をどのように見直していくべきかを考えるきっかけとなるものであった。「考え、議論する道徳」の授業を展開するにあたり、教師は子ども達に「なぜ」を問い、考えさせることができる教材選択を行うべきであると認識できた。道徳の授業を通して、実生活で自分自身を見つめること、また物事を多面的・多角的に考えることを意識づけできるよう、子ども達と共に将来教師になる私自身も学び続けていきたい。

教科授業実践コース 本木 和幸

学校全体で行われる道徳教育と道徳科はどう違うのかという疑問を持ち、講演に臨んだ。学校全体で行われる道徳教育では行いの善し悪しを学び、道徳科ではなぜ善いのか、なぜ悪いのか、二項対立でないものを深く考え、学ぶという学習内容の違いについて学んだ。また、道徳科の授業において、内容への考えを深めるためではなく、話し合うことを目的として意見を出しているときがあるという言葉を受け、道徳を教科として行う意義と、目的意識を教師が常に持つことの必要性について深く考えることができた。これから、道徳科に対する理解を深めることで、学校全体で行われる道徳教育の目的や意義を常に考えていきたい。

クロスセッション 2017


「クロスセッション」は、大学院学生が主体的に年間4～6回程度を目途に、時間割外に開催している自主セミナーであり、平成21年度から実施されている。発表担当の学生が文献研究や実習の要点をプレゼンテーションした後に、その内容に関して、他の学生や教員が一緒になって質疑応答を行う。教員は、その学生が今後検討すべき課題、その考察手順、方法等を助言するとともに、プレゼンテーションのスライドや配付資料についても改善点を指摘、助言して、大学院学生の実践力向上を支援している。こうした学び合いの機会をとらえて、学部卒大学院生、現職教員大学院生が共修、協働し、研究者教員、実務家教員も一緒に参加して議論することにより、討論(理論)と実習(実践)の有機的な往還が可能となるよう努めている。



教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
～第1回 クロスセッション～

日時:7月24日(月) 16:10～17:40
場所:31番教室

- M3 山口 菜奈
『通常学級における英単語修得に関する実践研究
～英単語綴り困難への支援を中心に～』
- M2 池山 莉央
『実態把握に基づく障害のある子どもの
授業づくりに関する実践研究』
- M2 米田 悦子
『特別な支援を要する児童への支援の在り方と効果について
～姿勢や身体の動きと認知、行動、情緒の関係～』
- M2 平野 晶子
『小学校におけるインクルーシブ教育の推進に関する
実践的研究』
- M1 下田みのり
『互いを認め合える 温かい学級づくり』
- M1 野中 茂樹
『キャリア教育』
- M1 本多 利衣
『多様性を尊重しあうコミュニケーションづくりに関する
実践的研究～発達障害を念頭においた障害理解教育～』
- M3 山本 実来
『小学校中学年段階における
自尊感情の低下を防ぐ取り組み』
- M1 兼 祥子
『自閉症スペクトラム症児における
ストレス調整を支援するツールの開発』



教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
～第2回 クロスセッション～

日時:7月27日(火) 16:10～17:40
場所:25番教室

- M2 山科 理穂
『通常学級における漢字学習の指導と支援』
- M1 相川 広恵
『小学校における発達障害のある子どもへの指導に
関わる実践研究』
- M2 安原 知邑
『児童が主体的に居心地がよい集団づくりをしていくための教師
の支援に関する実践及び考察』
- M1 須寄 美也子
『生徒の適応する力を高めるための教師の手立て』
- M1 石田 早季
『小学校におけるキャリア教育』
- M2 田添 智美
『ユニバーサルデザインの視点を活かした授業づくり
～小学校国語科における「書くこと」の学習活動に着目して～』
- M1 江川 朋幸
『一人一人が大切にされ自尊感情が育まれる学級づくり
～グループワークの計画的な実践を通して～』
- M2 金原 亮介
『キャリア教育について』
- M1 登本 恵里花
『高校生の社会性を高めるための教師の手立て
～授業やホームルーム活動におけるグループ活動等を通して～』

教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
～第3回 2月 クロスセッション～



日時:2月21日(水) 14:30～16:00
場所:42番教室

- M2 平野 晶子(ひらの しょうこ)
『小学校におけるインクルーシブ教育の推進に関する実践的研究～特別支援学級の実践を中心に～』
- M1 兼 祥子(かね しょうこ)
『自閉スペクトラム症児における勝ち負けのこだわりに対するストレス調整』
- M1 本多 利衣(ほんだ りえ)
『多様性を尊重しあうコミュニケーションづくりに関する実践的研究
ー小学校における発達障害児を念頭においた障害理解教育実践ー』

教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
～第4回 2月 クロスセッション～



日時:2月22日(木) 14:30～16:00
場所:42番教室

- M1 石田 早季(いしだ さき)
『小学校におけるキャリア教育』
- M1 下田 みのり(しもだ みのり)
『互いを認め合える温かい学級づくり』
- M1 登本 恵里花(とうもと えりか)
『高校生の社会性を高めるための教師の手立て
～授業やホームルーム活動におけるグループ活動等を通して～』

長崎大学大学院教育学研究科 学級経営・授業実践開発コース
H29年度 第1回 クロスセッションのご案内

日時:5月19日(金)16:10～17:40
場所:教育学部第2コンピュータ室
形式:ラウンドテーブル
テーマ:実習・研究について



話題提供者

M2 入江 亮生
校種:中学校(数学)

M2 笹田 茜
校種:小学校

M2 砂田 真子
校種:小学校

M2 寺園 康秀
校種:中学校(理科)

M2 永富 英臣
校種:小学校

M2 溝手 浩太郎
校種:小学校

ラウンドテーブルとは、少人数のグループでざっくばらんに議論を行うものです。グループは、大学の先生方や現職の先生、院生 学部生などを交え、構成します。

大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。参加したい、興味があるという方は下のアドレスにご連絡ください。

学級経営・授業実践開発コース M2 砂田真子
E-mail: sunada-mako@arion.ocn.ne.jp

長崎大学大学院教育学研究科 学級経営・授業実践開発コース H29年度 第2回 クロスセッションのご案内

日時:6月16日(金)16:10~17:40
場所:教育学部第2コンピュータ室
形式:ラウンドテーブル
テーマ:実習・研究について



話題提供者

M1 朝倉 諒
校種:小学校

M1 小鉢 拓
校種:小学校

M1 田村 健太郎
校種:高校数学

M1 松永 千茄
校種:小学校

M1 矢島 佑樹
校種:小学校

M1 柳川 優希
校種:中学校理科

ラウンドテーブルとは、少人数のグループでざっくばらんに議論を行うものです。グループは、大学の先生方や現職の先生、院生 学部生などを交え、構成します。

大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。参加したい、興味があるという方は下のアドレスにご連絡ください。

学級経営・授業実践開発コース M2 砂田真子
E-mail : sunada-mako@arion.ocn.ne.jp

長崎大学大学院教育学研究科 学級経営・授業実践開発コース H29年度 第3回 クロスセッションのご案内

日時:7月21日(金)16:10~17:40
場所:教育学部第2コンピュータ室
形式:ラウンドテーブル
テーマ:実習・研究について



話題提供者

M3 木下 卓哉
校種:中学校(数学)

M2 生嶋 夏希
校種:小学校

M3 島塚 亮輔
校種:小学校

M2 砂田 真子
校種:小学校

M2 田中 僚樹
校種:小学校

M2 山越 翔陽
校種:小学校

ラウンドテーブルとは、少人数のグループでざっくばらんに議論を行うものです。グループは、大学の先生方や現職の先生、院生 学部生などを交え、構成します。

大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。参加したい、興味があるという方は下のアドレスにご連絡ください。

学級経営・授業実践開発コース M2 砂田真子
E-mail : sunada-mako@arion.ocn.ne.jp

長崎大学大学院教育学研究科 学級経営・授業実践開発コース H29年度 第4回 クロスセッションのご案内

日時: 10月20日(金) 16:10~17:40
 場所: 教育学部第2コンピュータ室
 形式: ラウンドテーブル
 テーマ: 実習・研究について



話題提供者

M2(現職)野口 将信
校種: 小学校

M1 大石 溪
校種: 中学校数学

M1 城戸 佑也
校種: 中学校理科

M2 濱崎 知彦
校種: 小学校

M1 松尾 頼亜
校種: 中学校数学

M1 森竹 恭眞
校種: 中学校社会

ラウンドテーブルとは、少人数のグループでざっくばらんに議論を行うものです。グループは、大学の先生方や現職の先生、院生 学部生などを交え、構成します。

大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。参加したい、興味があるという方は下のアドレスにご連絡ください。

学級経営・授業実践開発コース M2 砂田真子
E-mail: sunada-mako@arion.ocn.ne.jp

長崎大学大学院教育学研究科 学級経営・授業実践開発コース H29年度 第5回 クロスセッションのご案内

日時: 11月24日(金) 16:10~17:40
 場所: 教育学部第2コンピュータ室
 形式: ラウンドテーブル
 テーマ: 実習・研究について



話題提供者

M2(現職)加藤めぐみ
校種: 小学校

M2 寺園 康秀
校種: 中学校理科

M2 溝手 浩太郎
校種: 小学校

M2 砂田 真子
校種: 小学校

M2 入江 亮生
校種: 中学校数学

M1 田村 健太郎
校種: 高校数学

ラウンドテーブルとは、少人数のグループでざっくばらんに議論を行うものです。グループは、大学の先生方や現職の先生、院生 学部生などを交え、構成します。

大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。参加したい、興味があるという方は下のアドレスにご連絡ください。

学級経営・授業実践開発コース M1 松永千茄
E-mail: bb11217014@ms.nagasaki-u.ac.jp

長崎大学大学院教育学研究科 学級経営・授業実践開発コース H29年度 第6回 クロスセッションのご案内

日時:12月22日(金)16:10~17:40
場所:教育学部第2コンピュータ室
形式:ラウンドテーブル
テーマ:実習・研究について



話題提供者

M3 木下 卓哉
校種:中学校数学

M2 永富 英臣
校種:小学校

M3 島塚 亮輔
校種:小学校

M2 山越 翔陽
校種:小学校

M2 田中 僚樹
校種:小学校

ラウンドテーブルとは、少人数のグループでざっくばらんに議論を行うものです。グループは、大学の先生方や現職の先生、院生 学部生などを交え、構成します。

大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。参加したい、興味があるという方は下のアドレスにご連絡ください。

学級経営・授業実践開発コース M1 松永千茄
E-mail : bb11217014@ms.nagasaki-u.ac.jp

長崎大学大学院教育学研究科 学級経営・授業実践開発コース H29年度 第7回 クロスセッションのご案内

日時:1月26日(金)16:10~17:40
場所:教育学部第2コンピュータ室
形式:ラウンドテーブル
テーマ:実習・研究について



話題提供者

M1 城戸 佑也
校種:中学校理科

M2 生島 夏希
校種:小学校

M1 小鉢 拓
校種:小学校

M1 森竹 恭眞
校種:中学校数学

M1 松永 千茄
校種:小学校

ラウンドテーブルとは、少人数のグループでざっくばらんに議論を行うものです。グループは、大学の先生方や現職の先生、院生 学部生などを交え、構成します。

大学院でどのような研究や実習が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。参加したい、興味があるという方は下のアドレスにご連絡ください。

学級経営・授業実践開発コース M1 松永千茄
E-mail : bb11217014@ms.nagasaki-u.ac.jp

教育実践研究成果の発表概要

32名の発表者(1名はインフルエンザのため指導教員が概要説明を行った)による教育実践研究成果発表会が、平成30年2月16日、17日の日程で、文教スカイホールを会場に開催された。本発表会は、理論と実践を架橋する教育を目指す中で、大学院生が修めた多様な研究成果を地域や学校現場に還元することを旨としている。長崎県教育委員会、各市町教育委員会、長崎県教育センター及び県内の全ての小・中・高等学校に広く周知することにより、大学教員57名、学外教育関係者25名、学部生6名、一般1名、発表者を含む大学院生60名の合計149名の参加を得た。研究成果は、教育実践や学級経営上の課題解決に資するものや、子ども理解や特別支援教育などの実践的な発表であり、参加者と活発な質疑応答がなされた。以下に、今年度の発表者とその発表概要を記す。

(1)発表者及び発表概要

第1日(平成30年2月16日(金))発表者(発表順)

- 1 岩崎 紗知 「仲間とのかかわりを大切にする態度を育てる体育の授業づくり－仲間と運動を行う楽しさを感じることを通して－」



本研究の目的は、「仲間とのかかわりを大切にする態度」を育てる体育授業の要因を明らかにすることである。そのために、児童が感じる体育授業の楽しさとして、「動く楽しさ」「伸びる楽しさ」「交わる楽しさ」「わかる楽しさ」の四つを定義し、「仲間と運動を行う楽しさ」を大切にしたい授業を実践した。実践①では、「交わる楽しさ」をベースとし、かかわりを大切にするための手立てを取り入れた授業の実践を行った。実践②では、「動く楽しさ」をベースとし、誰もが「できる」ということを大切にしたい手立てや、自分やグループの力が伸びる楽しさや喜びを味わえるようにするための手立てを取り入れた授業を実践した。その結果、「態度」の育成を目指す体育授業においては、運動ができる、活動のルールがわかるというような「運動の土台」をしっかりとつくることの重要性が示唆された。

- 2 田中 僚樹 「思考力・判断力を育む小学校社会科授業実践－思考ツールを用いた対話を通して－」



本実践研究の目的は、小学校社会科において、子どもたちの思考力・判断力を育むことをめざした小単元の開発、実践、検証を行うことである。本実践研究では社会的論争問題に対して実際に子どもたちが判断する場面を取り入れた小単元「長崎市も水俣市のようなごみの分別をしたほうがいいのか？」を開発した。長崎市の二倍の品目にごみを分別している水俣市を例に、長崎市は水俣市のような分別方法にするべきかについて子どもたち一人一人が多角的に思考し、判断できることをめざした。小単元の中に思考ツールであるメリット・デメリットチャートやフィッシュボーンチャートを作成する場面や、友達と考えを伝え合う対話の場面を設けることで、子どもが学習問題に対して多角的に思考し、判断する際の手助けになると考えた。実践後に学習問題に対して多角的に思考し、判断することができるようになった子どもがいたことから本実践研究の成果が得られた。

3 永富 英臣

「振り返りで学力を向上させる授業実践～終末場面における書く活動を通して～」



本実践研究では、小学校5年生の国語科・算数科の授業において、毎時間の終末に学習の振り返りを書く時間を設定することにより、児童の学力向上を目指して授業を実践した。振り返りを通して、自分の成長を自覚したり、更に学びたいことを明確にしたりすることにより、児童の意欲が引き出されている様子を見取り、振り返りが意欲の喚起に有効だということを実感することができた。また、授業中の様子やテストの結果から、振り返りによる意欲の喚起が学力の向上に関係しているのではないかという示唆を得ることもできた。しかし、テストの結果には振り返り以外の要因が影響している可能性があることや振り返りの更なる活用、振り返りの質の向上など、今回の実践について課題は山積している。それらを踏まえて、今後は振り返りの活用やその質の向上なども視野に入れて授業を行い、自らの授業力をのばし、全ての児童がわかったと思える授業を実現していきたい。

4 砂田 真子

「児童の主体的な学びを促す教師の手立て～協同学習の実践を通して～」



本実践研究では、児童の主体的な学びを促す教師の手立てを明らかにすることを目的とし、研究を進めた。実習先の学級の実態に合わせて、協同学習を取り入れた授業を構想し、その授業の実践・考察を行った。授業内容は、小学校4年生の国語科「一つの花」と算数科「計算の順序」で、それぞれ単元レベルで構想した。実際に講じた手立ては、杉江(2011)の「学び合いを促す51の工夫」を参考とし、ワークシートの工夫や、児童に協同学習中の目標や学び方を意識させた。考察は、授業での児童の様子や記録(ビデオ・ボイスレコーダー)やワークシートの記述から、児童の主体的な学びの実現を図ることができているか判断した。結果としては、児童の友達の意見を積極的に聞き合う姿勢や、友達と協力して学ぼうとする様子、また、授業での達成感や次の学びへの意欲の向上を見取ることができた。今後も、さらに児童の主体的な学びを促す教師の手立てについて、追究していきたい。

5 溝手 浩太郎

「自他の納得を大切に語る話合い活動の実践」



本実践研究の目的は、学級会における合意形成の場面に着目し、多様な他者と折り合いを付けて合意形成を図る力を育むことである。そのために「自分もよく、他者もよい」と思えるような結論、つまり「自他の納得」を目指す話合いを構想し、繰り返し実践してきた。また、授業実践で見られた、「合意を導くプロセス」を活用した場面に着目し、それが「自他の納得」につながっていたかという視点で考察を行った。「合意を導くプロセス」を活用することは、「自他の納得」に向かううえで有効であることがわかったが、プロセスを活用するまでに実践や目的を意識した意見を出し合う必要性も示唆された。また、「相手のことを思いやる態度」や「問題解決のために他者と協力

する力」を他の学習とも関連させながら育てていく必要もある。今後の実践においても、自らと異なる考えをもった他者とお互いの「納得」に到達できるような話し合い活動の在り方を模索していきたい。

6 山本 実来

「小学校段階における失敗に関する認知を整えるための実践研究」



本実践研究では、主に知能観マインドセットと自尊感情との関連を見た。マインドセットとは、努力によって能力が伸びると考えるか否かによって分類される思考様式である。実践研究の結果、知能観マインドセットと自尊感情の間には関連があることが示された。さらに、自尊感情の低下に関わる「失敗の認知の仕方」「自分への見方」2つのポイントが、マインドセットと関連することもわかった。「失敗を怖れない」ことは挑戦を促す。また、「努力によって能力は伸びる」という信念を持つことは自分で限界を設けずに努力することを促す。しなやかマインドセットを育むことは、自尊感情の低下を防ぐだけでなく、児童を成長へと導き、さらに自尊感情の向上へつなげることとなり得るのである。その他、児童への教師の関わり方も重要であることを実感した。児童のマインドセットを左右する教師の役割の重要性を肝に銘じて、今後も研鑽を重ねていきたい。

7 安原 知邑

「児童が主体的に居心地がよい集団づくりをしていくための教師の支援に関する実践及び考察」



本実践研究では、通常学級において、児童が人と関わり合うことのよさや楽しさを感じ、安心して学校生活を送ることができるようにする教師の支援を軸に実践研究を行なった。対話に焦点をしぼり、教師の児童への言葉かけに加え、児童同士の対話力を育成することで、児童が安心して楽しく居心地のよい集団をつくることのできるのではないかと考え、実践、考察を行った。本実践研究により、児童の感情や行動の様子を言語化して伝え、児童を様々な場面で認めたり褒めたりする言葉かけは、児童の安心感や学習意欲に効果的に働いていることが示唆された。また、複数の見取りや、質問紙等を活用することで実態把握は、より確かなものになり、より深い児童理解につながることを確認でき、指導及び支援をより適切なものにする事ができた。今後はさらに、児童の主体的に集団づくりを行うための支援を検討していきたい。

8 田添 智美

「ユニバーサルデザインの視点を活かした授業づくり－小学校国語科における「書くこと」の学習活動に着目して－」



本実践研究では、国語科の「書くこと」における学習活動に着目してユニバーサルデザインの視点を活かした指導方法を検討・実践し、その有効性について考察することを目的とした研究を行った。まず、授業における児童の困難さを把握して実態に適した授業の手立てや働きかけを検討するために、2つのアンケート及び実態把握チェックリストを実施した。そして、小貫・桂(2014)の授業のユニバーサルデザイン化モデルを参考に対象学級のニーズを把握し、それに合った具体的な手立てを、活動報告書と意見文を書く2つの単元で実践した。さらに、実践後には、アンケートやビデオ記録、ワークシートの記述内容の分析を行った。その結果、「書くこと」の学習活動において、授業のユニバーサルデザイン化モデルの理解階層、特に「焦点化」「スモールステップ化」「視覚化」「共有化」の4点が授業への参加や理解の促進に有効であることが示唆された。

9 江川 朋幸

(現職教員大学院生)

「一人一人が大切にされ自尊感情が育まれる学級づくり－グループエクササイズの計画的な実践を通して－」



本研究では、「現場の教師が無理なく実践できる」ということを重視しつつ、「一人一人が大切にされ自尊感情が育まれる学級づくり」を目指して実践を行った。具体的には、小学校5年生において、朝の会、帰りの会での日常的なエクササイズ、日々の授業における学び合い、学級活動等のカリキュラムに合わせての定期的な構成的グループ・エンカウンター(SGE)を、計画的に行った。その結果、「一人一人が大切にされる」という面では、友達に認められていると感じる児童が増加した。一方で、友達とのトラブルを抱えている児童は一度減少した後、再び増加した。自尊感情は、自分で自分の良さに目を向けるSGEの実施後に高まった。また、自尊感情の高まりは、被侵害感の高い児童で顕著であった。Q-Uと自尊感情測定尺度の分析からは、友達に認められる経験によって、自分への肯定的な感情だけではなく、友達に対する肯定的な感情も高まることが示された。

10 山科 理穂

「通常学級における漢字学習の指導と支援－気になる児童に着目して－」



本研究では、通常学級の小学3年生を対象とし、漢字学習につまずきのある児童に着目した漢字の指導と支援の効果について検討すること及び、クラスワイドの支援にも目を向け、指導の配慮や教材について検討した。教育実践では、アンケート、漢字テスト、学級担任へのインタビュー、行動観察から、気になる児童と学級の実態把握を行い、気になる児童が学習に参加し、「わかる」「できる」と感じることができる授業と短学習を行った。事後のアンケートとテストにおいて期待する結果がでなかった児童もいたが、実践後、学級の半数以上の児童が漢字学習を好きであると回答するなど、気になる児童の実態をもとにした指導・支援は、学級全体の学習の楽しさ

や理解の促進に広がりを見せた。児童の学習に対する興味、関心、意欲は変化していくため、丁寧かつ継続的な児童の実態把握をもとにした指導・支援が求められる。

11 相川 広恵
(現職教員大学院生)



「発達障害のある児童が通常の学級でみんなとともに高まる授業～通級指導教室との連携による授業のユニバーサルデザイン～」

公立小中学校の通常学級に在籍する児童生徒の6.5%が学習面または行動面で著しい困難を示すと報告されているが、困難を示す児童生徒に対する支援と同時に、どのように学級全体を指導するのか検討する必要性も指摘されている(文部科学省、2012)。本実践研究は、通常学級に在籍する授業参加行動の少ない発達障害のある児童に対して、通級指導教室において困り感に寄り添う支援やアセスメント等を行い、通常学級において、特性や認知処理様式を生かした算数の授業や互いの個性を尊重する学級をつくるための取組を行うことで、学級のみんなとともに授業に参加できようを目指すことを目指した。「継次処理」(聴覚的・言語的の手がかりや順序性を重視)と「同時処理」(全体を踏まえ視覚的教材や運動的活動を重視)を生かした授業により、対象児童は授業参加できるようになり、学級のみんなにとってもわかりやすい授業を実現することができた。今後、他教科でも研究を継続する予定である。

12 山口 栞奈



「通常学級における英単語習得に関する実践研究～英単語綴り困難への支援を中心に～」

本研究では銘苅(2015)をもとに(1)英単語綴りと、基礎スキルとなるローマ字書字スキルにおける生徒の実態を明らかにすること、(2)生徒の実態に基づいた一斉指導における効果的な指導・支援方法を梅津ら(2008)の通常学級における多層指導モデルから検討することを目的とした。事前評価において生徒の実態把握をした上で授業実践を行い、事後評価において授業実践の効果を検討した。その結果、英単語綴りテストの平均点は2校ともに有意に上昇した。またローマ字書字スキル、音節数と正書法の検討から、音と文字の対応があり、音節数の少ない単語から段階を踏んで指導することと、正書法を種類ごとに分けて明示的に指導することが英単語習得困難の改善に有効である可能性が確認できた。英単語習得を支援することは生徒の英語に対する意識や意欲の向上につながると考えられるため、英単語指導の時間を計画的・継続的に授業に取り入れていくことが重要である。

13 遠藤 真紀
(現職教員大学院生)



「協働で学びを深める英語授業の在り方について－発話活動における生徒同士の学び合いの分析を通して－」

新学習指導要領では、アクティブ・ラーニングを導入して、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、日々の授業を改善していくための視点を共有することが求められている。本実践研究では、英語授業において生徒が主体となり協働で学びを深める授業づくりを目指して、発話活動における生徒間の修正情報のフィードバックについて研究を行った。その結果、教師から一方的に教えられるのではなく、生徒たちが自ら考え、教え合い、疑問点を協力して調べて活用するという主体的な学びが行われていた。これらの活動を通して、学習者が実際に英語でコミュニケーションを行う中で、文法・語法・発音・語彙の選択等について学び、さらに英語力を高めていく可能性があることが示唆された。今回の取り組みで得られた成果を今後の学校現場で生かして頑張っていきたい。

14 寺園 康秀



「『人間関係形成・社会形成能力を育む教師の手立て』～学級活動、教科指導、帰りの会に着目して～」

本実践研究は、生徒の人間関係形成・社会形成能力を育む教師の具体的な手立てを明らかにすることが目的である。上記目的のもと、中学1年生の学級会・教科指導・帰りの会を対象に参与観察を行った。学級会の場で話し合い活動を充実させるためには、日常的な教育活動の中で話が聴ける関係、自分の考えを伝え合える関係を育む必要がある。その具体的な場が、教科指導や帰りの会等であり、上記時間の中で「聴く姿勢」や考えを伝える練習、実践、習慣化がなされていた。しかし、これらのうちどれか1つの手立てを行うだけではその効果は見込まれず、幾つもの手立てを複合的な機会の中で講じる必要がある。なぜなら、教師が行う教育活動は1つ1つが相互に繋がっており、生徒はそれらの経験を蓄積しながら成長するからだ。しかし、本実践研究では中学1年以外を対象とした具体的な手立てを考察することはできていない。今後教師として実践する中で検討していきたい。

15 金原 亮介



「中学・高等学校における効果的なキャリア教育に関する実践的研究」

本実践研究では、現在の職場体験・職業体験を中心としたキャリア教育に「労働教育」を加えることで、より「効果的」なキャリア教育になるのではないかと考え、その手だてを立案・実践し、検討・考察した。高校での授業では、「ブラックアルバイト」の実例を題材に「自分が同じような状況に陥ったらどうするか？」を考えさせた。「進路自己選択効力」尺度得点の事前・事後間の比較によって効果を吟味した。その結果、3年生では事前に比べ事後の得点が有意に上昇したが、1年生では変化は見いだされなかった。ここから、子どもたちに将来のことを考えさせる授業を行う際は、題材をいかに「自分の事」として捉えさせるか、が重要だということが示唆された。また、生徒の感想から「労働教育」を扱うことは単に「労働者の権利」や「働くルー

ル」を知る・考えるだけでなく、「自己の在り方・生き方」にも触れることができる深い題材にもなりえる可能性が窺われた。

16 野中 茂樹
(現職教員大学院生)



「キャリア教育の実践－よりよい進路選択を自分の意思で－」

どのような学校でも実施可能で、生徒が自分の意思でよりよい進路選択をできるようになるキャリア教育の探求を目的とした。実践校は長崎県立A高等学校。1学年5クラスで、その中の2クラスは総合学科である。実態把握として、教員への聞き取りと授業見学を行い、学校意欲・進路意識アンケートを授業実践の前で行った。授業実践は総合学科1年の1クラスで行った。各自で自分の進路目標を達成するために今何を頑張ればよいのか複数枚付箋に書かせた。各自の付箋を持ち寄り、グループで何が最も大切なのかを協議して、大切である順にピラミッド状に配置させた。なぜその付箋が、最も大切、そして最も大切でないものとして配置されたのか、グループで話し合いその理由を書かせた。それぞれの理由を共有することで努力目標を明確にさせた。進路意識は、授業実践クラスでは統制クラスに比べ、授業実践後に有意に上昇したことが見出され、実践の効果が検証された。

第2日(平成30年2月17日(土))発表者(発表順)

17 米田 悦子
(現職教員大学院生)



「特別な支援を要する児童への支援の在り方と効果について－姿勢や身体動きと行動、情緒の関係－」

本実践研究は、特別な支援を要する児童に対し、姿勢の保持や安定した身体の動きを提供する支援を行うことによって、行動や情緒の発達を促すことを目的とした。実践研究1では、通級指導教室において、身体の動きに重点をおいた活動内容にし、所属学級との連携を図りながら進めた。行動や情緒の発達に顕著な成長が見られたが、この変化は、通常の学習・経験でも起こり得るとも考えられ、介入の直接的な効果の実証にはいたらなかった。このことを受け、実践研究2では、通常学級において、行動や情緒の変化の見取りを焦点化し、姿勢や身体の動きからのアプローチによるプログラムを実践した。プログラムを実践した日と実践しなかった日とでは、児童の行動の安定や活動意欲等に違いが見られたことから、学級全体においても、行動、情緒ともに安定した中で、教育活動の充実につながると考えられる。研究で得た効果を、魅力的な活動として波及させていくために、今後も継続した実践実績を伴って、説得力のある教育活動にしていきたいと考えている。

18 池山 莉央

「障害のある子どもの実態把握とそれに基づく指導実践－重度・重複障害児の概日リズムに配慮した指導を中心に－」



本実践研究では、まず予備的検討として、A校において知的障害のある児童(男児1名)に対する実態把握を行った。その後、X校において重度・重複障害の児童(男児1名)の実態把握と授業実践を行った。実態把握については、自身の実施結果と対象児童の担当教師が行った結果を比較・検討した。実態把握の視点として、(1)発達や学びの経過を踏まえて現在の子どもの実態を把握すること、(2)評価尺度構成の内容や基準について理解し、吟味すること、(3)芽生え期にある行動や反応を積極的に読み取ること、(4)わずかな動きや表情の変化を含めて子どもの心理状態を積極的に読み取ること、の重要性を再認識した。また授業実践では、対象児童の概日リズムに着目し、睡眠表を作成して覚醒の高い時間帯を特定した。その時間帯に授業実践を繰り返したことで、対象児童の呈示物に対する気づきを促すとともに自発的な動きの誘発と覚醒状態の維持につなげることができた。

19 山下 実咲

「自己理解を高めコミュニケーションの育ちを促す指導・支援－発語のある自閉スペクトラム症児の事例から－」



本実践研究では、特別支援学校中学部に在籍する、発語のある自閉スペクトラム症の生徒1名を対象とし、自己理解を高めコミュニケーションの育ちを促すことを目的とした指導・支援を行った。その結果、自己理解ワークにより、自己理解の様相を明らかにするとともに、そこで得た結果をコミュニケーションの練習に生かし、質問に応答できる内容を増加させることができた。また、セルフモニタリングにより、自身の見通し及び行動に自信を持たせ、歯磨き場面における「〇〇してもいいですか？」という事前の確認の質問の生起を低減させ、自ら進んで行動できる場面を形成することができた。以上の結果より、対象生徒にとって必要な、適応的なコミュニケーションの獲得の一側面に寄与することができたといえる。今後、本実践研究の成果や課題を基に、実際の学校教育における指導・支援にあたりるとともに、教育実践研究に取り組んでいきたい。

20 猪子 夏菜子
(現職教員大学院生)

「共に考える道徳授業の試みと反省－「発問」「切り返し」「つなげる発言」に焦点をあてて－」



本実践研究では、児童と児童、児童と教師とが「共に考える」道徳授業の実践を目指し、構想・実践を行ってきた。「共に考える」とは、単に話し合い活動を取り入れればよいというものではない。まずは、児童が授業に興味・関心を持ち、自分の考えを伝えて相手の考えを聞く、その中で相手の考えと自分の考えを比べることが重要である。そこで特に「発問」「切り返し」「つなげる発言」に焦点をあてた実践を試みた。「発問」では、事前の教材研究や模擬授業を通しての「発問」の吟味の重要性を改めて実感できた。「切り返し」では、児童の意見に対し、教師がどのような意図を持って返答するかが大切になって

くる。「つなげる発言」は、児童が「共に考える」ことを意識するのに有効であるが、全員が使えるように手立てをうつ必要がある。このようにして試みと反省を繰り返し、得られた成果を学校現場で具現化できるように、これからも研鑽を重ねていきたい。

21 島塚 亮輔

「児童が自己を見つめ直すことのできる道徳の授業づくり-対話的な学びに焦点を当てて-」



本実践研究では、授業で取り扱う道徳的価値について、児童が授業を通して今までと異なる新たな価値の見方を学び、それをもとにこれまでの自分の価値の見方を見つめ直す、つまり自己を見つめ直すことのできる道徳の授業を構想し、実践した。授業を構想する視点として、学習指導要領の内容項目を理解する価値理解、児童の実態を把握する児童理解、資料の内容を分析する資料分析を大切にした。そして、授業実践を行い、授業者の振り返りやワークシートの記述から、児童が自己を見つめ直すことのできる道徳の授業になっていたかを考察した。そこから、児童に新たな価値の見方を学ばせることによって、児童の価値の見方が変容したと考えられた。一方で、授業展開の中で、自己を見つめさせる機会がなかったため、自分を振り返ることがあまりできなかつたと考えられた。意識的に自己理解を促すような授業構想が必要であった。

22 笹田 茜

「考え、議論する道徳」を目指した道徳授業-児童が自分の考えを持って議論するための教師の手立て-」



本実践研究では、「考え、議論する道徳」の実現を目指して、児童が自分の考えを持って議論するための教師の手立てを取り入れた道徳授業を構想・実践・考察することで、手立ての改善の方策を示すことを目的とした。具体的には、児童が自分の考えを持つことができるように「程度」を問う発問を取り入れたが、その問いが本時のねらいと結びつきが弱かつたため、授業者が本時で取り扱う内容項目を深く理解し、詳細に児童の実態を把握することが必要だという改善策を見出し、その後の授業実践に反映させた。また、授業実践初期は、議論活動として設定した学習活動において、児童が考えを発表するのみであったため、出された考えに対し比較・検討を促す発問を行い、授業実践を改善した。この実践研究を通して、「児童が自分の考えを持って議論する」ための手立てをより質の高いものにすることができ、「考え、議論する道徳」の実現の可能性を示すことができた。

23 菊田 めぐみ
(現職教員大学院生)



「身近の意識の広がりー国際理解教育の視点からー」

本実践研究では、小学6年生のカリキュラムを、国際理解教育の考え方をもとに見直し、その効果や可能性について明らかにすることを目指した。具体的には総合的な学習の時間に、2つの国際理解ゲームを実施し、児童の「身近」の意識にどう影響を与えるか、アンケート等で変化を見取った。また年間を通して各教科や授業外の時間に、難民など「世界」に目を向ける話題を考えさせることで、国際理解教育との関連を見出し、その必要性を考えた。加えて、こうした取り組みについて、後から日誌やゼミ資料、授業記録等を振り返ることで教師自身の変化・成長を確認した。以上から、教師が教育の柱となるもの(本研究では国際理解教育)を持ち、あらゆる教育活動を見直しながら実践することは、児童そして教師自身に一定の影響を与え、有効に働くことを実感できた。それを示す評価資料を作成することが、修了後の私に課せられた課題である。

24 野口 将信
(現職教員大学院生)



「絵本読み聞かせを活用した外国語活動の授業実践」

本実践研究では、「外国語活動の授業において、英語絵本の読み聞かせの活用は、児童の発話が活性化されるために有効である。」という研究仮説のもと、外国語活動の授業において、同じ絵本を3回くり返す読み聞かせを行った。児童の自由記述の感想、発話に関する自己評価、単語理解テスト等の結果から、児童の様子に読み聞かせの効果をもたらす変容が見られた。そのため、くり返しの読み聞かせは、児童の発話を促す手立てとして有効であるとともに、児童の英語理解力を促す可能性があると考えた。また、学級経営の視点から、Q-U調査の結果にも向上が見られたため、外国語活動の授業改善が、児童同士のつながりの仕方に、何らかの影響があったのではないかと考えた。今回の実践研究での成果と課題をもとに、絵本の読み聞かせ効果について、更に追究するとともに、よりよい授業実践を目指して努力していきたい。

25 山越 翔陽



「子どもの伝えたい気持ちを引き出す小学校外国語活動の実践」

小学校外国語活動において、伝えたい思いを英語で伝えることができないことを解消することを目指して、授業実践を行った。実習1では、児童のコミュニケーション活動の様子を観察した。実習2では、コミュニケーションに必然性をもたせることをねらいとして授業実践を行った。実習3では、扱う表現が実際に使われる場面を意識してコミュニケーションの必然性考えた授業実践を行った。実習4では、児童のコミュニケーション活動を中心に観察することに加え、児童のコミュニケーションの実態を把握するために調査を行った。その結果、児童はコミュニケーションに困難が生じた際に日本語に頼ってしまう傾向があることが分かった。実習5では、実態調査を踏まえて、日本語に頼らずに伝えたいことを伝える活動を行った。その結果、子どもたちは、日本語に頼ることなく、伝えたいことを既有知識で伝えることが可能であることに気づくことができた。

26 生 嶋 夏 希

「子どもの実生活と結びつけながら展開する小学校外国語活動の実践」



本実践報告書では、外国語活動において実生活と結び付けた題材を用いることで、子どもの「話したい」という発話の意欲を高めることを目指した3つの実践を報告する。1つ目は、身近な地域をイメージしながら道を尋ねたり案内したりする日常を想定したコミュニケーションを意識した外国語活動を行い、子どもたちの積極的な活動をみとることができた。2つ目は、外国語活動ではないが、子どもたちの身の回りに存在するローマ字を題材とした授業を実践し、子どもたちの自発的な気づきを促すことができた。3つ目は、ARCSモデルを用いた単元計画をデザインし、単元を通して動機づけを意識した実践をすることができた。3つの実践を通して、子どもたちの実生活に結び付けた題材は知的好奇心を高めることに有効であると感じた。今後は、子どもの実態に適した難易度の学習課題を仕組むことで、子どもに自信や達成感を持たせる実践を目指していきたい。

27 入 江 亮 生

「数学への学習意欲を高めるための多角的アプローチ」



本実践研究では、中学生に対して「授業実践」、「個別の学習支援」、「学習コーナーの設置」の3つのアプローチを実践することにより、生徒の数学に対する学習意欲を高めることを目指した。3つの実践を通して、生徒が意欲的に問題に取り組む姿や、生徒同士で協力したり、競争したりしながら答えにたどり着こうとする姿が見られた。また、アンケートの結果や生徒の様子から、数学への意欲が高まったのではないかと示唆を得ることもできた。しかし、アンケート結果や生徒の様子には筆者の実践したアプローチ以外の可能性がある。加えて、実践したアプローチでは数学への意欲が喚起されない生徒や、設置した学習コーナーを見ない生徒がいたなど、多くの課題が残っている。それらを踏まえて、今後は現場で授業を実践する中で、生徒1人1人の特性を理解し、それぞれの生徒に応じたアプローチの実践と省察を繰り返すことで生徒の学習意欲を高めていきたい。

28 木 下 卓 哉

「数学に対する自己効力感の向上を目指した振り返り活動について」



本実践研究は、数学に対する自己効力感の向上を目指した振り返り活動の有効性を検証することを目的として実践を行った。実践として、授業の終わりに振り返りシートに「分かったこと」「できるようになったこと」を生徒に記述させる活動を行った。また、生徒が書いた振り返りシートは、作成したルーブリックにもとに記述内容を評価し、肯定的な内容のコメントをつけて返す活動も行った。自己効力感については「数学自己効力感尺度」を作成し、実践前後の尺度得点の変化から本実践の有効性を検証した。検証の結果、本実践の振り返り活動は自己効力感に作用していないことが明らかになった。振り返り活動の方法や振り返り活動をするための準備不足等の原因が考えられる。しかし、振り返りシートには生徒にとって教師

とのコミュニケーションツールとして機能することが分かった。今後は、実際に授業を行ったうえで振り返り活動を行いたい。

29 劉 寧 「エネルギー教育を通して主体的に関わる姿勢を育む技術科教育の検討」



本実践授業は、エネルギー技術利用の視点から環境に配慮し主体的に活動できる生徒の育成を目指し、生徒に技術選択の社会的意味を捉えさせることで、エネルギーに関する技術への関心や、エネルギー使用に対する態度の変化を見とることで、生徒の主体的に関わる姿勢を育む技術科教育の授業展開や指導法を検討した。具体的には、未来の日本を支える発電方法を評価・選択する問題解決学習をESDの学習展開を参考に設定した。その結果、授業前後のアンケート調査やワークシートの記述分析から、6割程度の生徒はエネルギーに関する関心を高め、節電を心掛ける意欲を見せた。また、7割の生徒がエネルギーやその変換技術の重要性を認識し、今後の社会や自身に必要な技術とそれを改良し、或いは必要な技術を生み出そうとする態度の変化が見られた。そして、現職教員の授業・指導内容との比較から、見通しのある学習や生徒自身の課題学習の思考を深化させる机間指導の重要性を指摘した。

30 川島 美穂 「中学校音楽科鑑賞領域における「音楽を聴く力」を養うための比較聴取」



本研究は「音楽を聴く力」を養うための比較聴取を用いた指導法について、その有効性を考察したものである。本研究での「音楽を聴く力」の定義は『音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受すること』とした。実践では、名曲鑑賞シートを用いた約10分間の比較聴取を行い、音楽を形づくる要素について一つひとつ理解し、それらを知覚し曲想を感じ受することを聴取の目的とした。実践の成果はワークシートの評価と記述の内容から多面的に考察した。結論として、生徒に「音楽を聴く力」を養うことができたと推察される。「音楽を聴く力」を養うためには、音楽を形づくる要素を理解し、それらを知覚し曲想を感じ受することが有効な手段である。名曲鑑賞シートを用いた比較聴取は、継続することで「音楽を聴く力」を養うことができる有効な指導法であり、選曲や発問などに改良を加えていくことで成果が期待できる。

31 上野 広恵

「できた」を実感できる手立ての実践研究－音楽授業への興味・関心を高めるために－



本研究では、生徒の音楽授業での苦手意識を明らかにし、苦手意識に対する指導と、「できた」と実感できる手立てを実践し、生徒に達成感を実感させる事により、音楽授業への興味関心を高める事を目的としている。実習校において、アンケート調査を実施し、様々な苦手意識が分かった。歌唱分野では大きな声を出す事に着目し、生徒同士で歌声の変化を伝え合う手立てを実践した。結果は、達成感を得る事ができた生徒がいなかった。鑑賞分野では楽器の聴き分けに着目し、楽器の形や音色を学び、鑑賞をしながら楽器を聴き取る手立てを授業実践した。結果は、多数の生徒が楽器を聴き取る事ができた。しかし、アンケート調査を実施できず、達成感が得られたと明確には言い難い。但し、鑑賞への興味が高まったとみられる感想を得る事ができた。今後も実際の教育現場で本研究に取り組み、多くの生徒の音楽授業への興味関心を高めていきたい。

32 山口 裕貴

「高等学校芸術科音楽におけるポートフォリオを活用した評価の可能性」



本実践研究では、「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」の評価をしやすいことを目的として、評価の根拠を残しそれをもとに評価することに着目し実践した。「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」の観点について、断片的なテストや観察中心ではなく、生徒の心情や考えをポートフォリオとして蓄積することで、評価しやすくなるのではないかと考えた。毎時のポートフォリオ資料によって、生徒が努力した点やつまづいているところなどを言語化させ、これらを活用して生徒の実態に合った授業展開が可能となった。また、評価する際は留意点やキーワード、ループリックを設定することで、ポートフォリオ資料を1つ1つループリックに対応させていき、断片的に見るのではなく単元を通しての変容として総括的にとらえることができた。ポートフォリオには学びの足跡が残されており、それらを実践材料として、根拠をもって評価することができた。



長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻
平成29年度教育研究成果報告書

平成30年3月発行

編集・発行者 長崎大学大学院教育学研究科
〒852-8521 長崎市文教町1-14
電話(095) 819-2263

印刷・製本 H.P.第一